

『微かなひかりに満ちている』

作 吉田康一

【登場人物】

チサト	—	二十八
敏行	—	四十五
ひとみ	—	三十二
まる	—	三十二
リナ	—	二十六
川島	—	三〇
なつ	—	三〇

【シーン】

- 1 不可視な存在を捉えようとする作品態度の表明
- 2 タペストリー
- 3 現在や背景
- 4 勇気と覚悟
- 5 タペストリー

チサトが、虚空に、ひとりの人物を見ている。

チサト ——

その相手は、いま、我々（観客）には見えないため、チサトだけが見ていて、それは傍目からすれば透明な幻影である。チサトを観察していると、追憶の中に存在する相手が窺えてくる。やがて小さく微笑んで、

チサト ——

その相手に、やわらかく右手を差し出した。

間 ——

相手は、それに答えないようである。

チサト ——

視線でまた求めた。

チサト ——

差し出しているじぶんの右手を見つめている。

長いくらいの間があつて、

その右手に触れるナニカがあつたかよう ——

チサトの指がすこし動く。

つかまえて、あつく握る ——

チサトは握っている手を眼差したまま、目がにじむよう ——

チサト ——

そして、相手をまっすぐ見つめた。

チサト ——

左手を添えて、チサトは（相手の手を）両手で包んだ。

温度と湿度の手触りを、感じているように包んでいて ——

チサト ——

その両手の握りには、ナニカ、想いが載せられているよう。

相手は、その想いをチサトの表情から感じ取れるよう。  
それはおそらく「ありがとう。さようなら」の類のように、傍目には見える。

チサト ——

口元がゆっくりと微笑のカタチになっていく。

まるでさよならを告げるように、その相手に背中を向けて——ストップ。  
その背中に音楽——

210 現在

チサトの周囲を見知らぬ人々が行き来する。

スマホを手にしたり、耳に当てたりしながら街を歩く姿が散見される。すれ違うそれぞれは、素知らぬ顔でそれぞれ過ぎてゆく。

チサト (あれから) 10年くらい経った(ように感じる)。

人々、ポツリポツリと散在しているなか、静寂あつて、やがて沈黙。

211 電車

電車のつり革を握っているチサト。

チサト —— 季節が移ろうと、風の匂いが変わる。

間。

チサト 遠浅の海岸を、潮がじわじわ引いていくみたいに、理由はわからないけれど、熱は引いていた。だれもがジンセのなかで、一度はそういう、デタラメな時期を通過するように。いずれにせよ彼のことは忘れてしまった。フシギなくらいアッサリと。自然に。どこに惹かれたのか、思い出せない。とんでもなく輝いて絶対的だったものが、時間とともに、おどろくほど色褪せてゆくの、人生は妙だなんて思う。

212 ホーム・電車

ひとみ 一〇月十一月は結婚式ラッシュだった。結婚式、日程人気ランキング、一位一〇月二位十一月三位五月四位九月。(以上!)という語調で)ゼクシー。オートムブライド。ジューンブライドって昭和(で絶滅危惧種テキナネーム)? 不本意な交際出費かさんで、財布が薄い。夜風も冷たい。(電車こない。)祝つても(じぶんが)祝われる機会ない。勝ち組負け組のライン、あるとすれば、周りの態度から容易にわかる。先月誕生日来ちゃって、歳と息苦しさがまたまた増えてしまった。

あらよつと、とホームに滑り込んだ電車に乗って、獣の目になって空席探すんだけど見当たらないので、小さく舌打ちして、思った以上に大きな音を出してしまつたようで、周囲(あたり)ヒヤッとさせたことにじぶんもヒヤツとして、まあ大人しく、はい、大人しく(しとやかに立っていることにした)。

骨身削つてするほど、わたししかできない、大した仕事してるわけじゃないし、職場どんどん若い子若い子でにぎにぎしてるし、つま弾きされる日がそう遠くないって思うんだけど、コンチキショールと思ういろいろを省略すると、まあ、お見合いアプリをはじめちゃったんです。かなしいかな、二年まえから。

## 2-3 電車

川島 さつきまで読んでいた小説がまだ(頭に)残っていた。ダクダクと作家の(素に近い)心が、曝け出されてあり、痛々しく感じてしまった。

男は——結婚式に参列するため、東京のホテルに向かう、途中、雨の日に現れるという「レエン・コート」を着た幽霊」の話聞き、以来、レインコートの男、歯車という不気味なマボロシ、身内のフコウ、フカシギに圧迫され悩まされる。話らしい話はナイ話。

淡々と、帰る目的地に向かう電車のなかで、ぼくは無目的に淡々と、文字ことばの上を歩いてきた。人間の「死」に繋がっていく、不安が、内面の苦しみが、陰鬱と押し出されるので、途中から苦しくなっていた。日常の一部として馴染み過ぎてしまった、いつもの景色をみた。それはどこということのないただの景色で、いまはただ真つ暗で、(車内に立つ)この上半身を映していた。

## 2-4 豊洲あるいは月島あるいは

リナ まだ幼かった頃、ホタル狩りに連れてってもらった。長く親のクルマに揺られてウトウトしてしまったので、あれがどこなのかわからないし覚えていない。たぶん長野。梅雨の真つ暗い夜に(甘い水を求めて草から草へと)飛び回る、幻想的なヒカリの光景を目のあたりにした。光と光。明滅しながら夜の空を舞ったりひっそりする光のオスとメス。強いのと弱い。求愛のコミュニケーション。ちいさな宇宙だった。(ふたつの光が強く輝くのは、あれは、パートナーになったアカシと教わった。)

タワーマンション、ベイエリア。東京都ご自慢の目新しい建物が、摩天楼のようにイケイケドンドン林立して、ここは一年ごと一日ごと変化している。ライトアップされた夜の景色は、(ビジネス残業のアカシじゃなく)ヒトの生活、ヒトの暮らしの営みで輝いている。(ちよつとの間)なのに静かで生活の音がない。夜も、昼間も、水の音ばかり聞こえる。都心の喧騒とはちがって、不気味な静けさに包まれていて、そして現実の持つべき、重たみが、感じられない。夜空を見上げて、広がる景色を眺める。この街の、景観に：ゆらゆらする——ナニカ特殊な場所、特殊な時間に解き放たれて：さながらゲンエイをみるよう。ひとり取り残されて、どこか、異なつたゲンジツの：位相にいるよう。

タワーなベイエリアも、あたしの育つたアノ、薄汚れた団地とおなじになる。か

つて競争率数十倍の、あこがれの団地だったというけれど、入居時の二〇代三〇代も、四・五〇年経てば老人ばかり残る。未来、ここは孤島になる。

## 2-5 電車

チサト 電車に乗って、吊り革にぶら下がって、あー今日の一日もなんだったんだろなあー、やることたつぷりやつても達成感ないなあー、給料あがないなあーとかぼかぼこ思ったことをクチにしないで思っていたら、目のまえのガラス窓のじぶんと目があった。暗い、じぶんの、灰色の顔を見る。みる。中央線を走る終電の、都会の街景色の素早く往来するガラス窓の上に、ずっと映って、居続ける、あたしという、あたしと思われる、じぶんを。みる。

## 2-6 電車

ひとみ あたりズラズラ眺めても、いい男いないのどうしてって思うけど、この時間（終電間際）の電車はこんなでしょって、でもアプリのなかでもなかなか、出会う機会ナイの、マジどうしたモンだろうってなわけです。会ったのは、二人しなくて、どっちも、かいぶつのような名前をつけてあげたいくらい（の男）だった。（自己申告の世界だからしょうがないものの、こんなもんなのかという思いがあります。）

きょう、ワゴンセール的に売り出しはじめたカーディガンが思いのほか飛ぶように売れて、唯一残ったのは、ブリリアントなピンクだったけど、おなじ販売員の若いのが「欠陥品じゃないのに売れ残るのかわいそおー、買っていいですか？」わたしに問うので、ショックで湯気カンカン烈火の如く、一瞬の間をつくったものの、引き取ろうとしてくれる後輩に、すがりつく如く是非買ってといつてしまった。（わたしは）ピンク似合う人生じゃないから、うらやましかった。はー。

## 2-7 道

リナ ホタル狩りは昔、ひとりでみてはいけないものとされていた。ホタルにまつわる不気味な信仰がいくつかあった。（ホタルの光が）夜の道を迷わしてだますバケモノの火だとか、悪鬼（あつき）の火だとか、狐火（キツネび）だとか。ホタルは柳の木にも止まるから、柳はヒトの亡霊が好む木だから、ホタルも幽霊かもしれないとか、生きている人間の魂でも、ホタルになり得るとか。

もう生き生きとした歴史の庶民の感情のなかであたしたちは生きてはいない。なので、ホタルの光をオスとメスの恋愛で眺めて、飛び回るヒカリとヒカリに、ユウレイを感じることもナイ。（加え）ヒトの上にもっと大いなる存在があるとい

う心のあり方で、セカイを捉える感受性は弱くなっている。あたしだってそう。まあもう、月にロマンを抱くよりも月の画像はアッサリ手に入るし、宇宙の起源を解き明かそうとしている時代なんだから、しようがないといえましょうがないのだけれど。(見る) この地下鉄だって、地下鉄としかいいようないし。

## 218 電車

まる いつもヒトと目を合わさないように、気をつけて、気をつけて、道を、街を、歩いたり移動したり、外を出ているあいだは、だいたい、うつむいて歩くようにしている。います。電車に乗って、すぐそばのだれか知らないヒトにも視線を向けないし、だれかにみられてるなって感づいても、それは気のせいということにしてやり過ぎします。なるべく視線を合わせないし、合わせたくない。だって………こわいから。うつむいて歩いていると、ときたま、ちっちゃい子どもと目があつたりして、ときたま……じつとみつめてくれるから……かわいいなって思う。こんな子はどんなオトコとオンナの掛け合わせだった産物なのかって、気になるんだけど、親のほう、オトナはみれない、みない。あたしは……あたしの世界は視界の、斜め45度ほど下の視界で世界を、捉えている。机でパソコンしている時の、アノ斜め。宇宙の秘密を解き明かす図鑑を、読みながら下校したランドセルの頃とおなじ姿勢。最近スマホをみているフリをして歩けるので便利。うつむきを続けるので、首のコリは、きつとヒトの倍あって、(でも上を向くことができない)。最近でも気になるオトコの子の川島君は、でもあまり観察することもできなくて、でも日常のときたま、立ち話することがあるんだけど、でも背が高いから、だからあたしの川島君はいつも、ベルトあたりの腰回りがあたしの川島君だった。でもたぶん、だれよりもきつと川島君の腰回りを、いや、たぶん腰から下の、下半身を、詳しく知っているし、きつとみていると思う。そばで川島君の顔の、目を鼻を唇をみるのがナイわけじゃないけれど、顔を見上げて顔をみると、いつも思う、川島君って背、高いなあ、標高だなあ、みるために見上げることがこんなにキツくてツラくて胸が痛くなるんだなって……いまは天井をみるようにこの車内の蛍光灯をみているけれど、そんなことを思うんで、思っていると、極端にあたしが見上げたから、まえのおじさんを驚かせたようで、安心できるほうをまた向くんです。

## 219 電車

川島 青空(文庫)が手のひらに広がる。

ある停車場でレインコートの男をみかけ、別の停車場でもみかけ、呼応してじぶんの視界に、半透明な歯車をみる。食事に蛆(うじ)の蠢(うごめ)く姿をみて、壁にかけたオーバーコートに、じぶんの立ち姿をみたように感じる。部屋の鏡に

は、皮膚の下の骨組みが、露（あら）わなじぶんの顔をみる。外灯のあかりに心の平穏を感じてベンチに落ち着けば、背中にレインコートが、いつの間にかだりどある。部屋に戻ると電話が鳴り響いて、身内のフコウを知らされる。死体はレインコートを着ていた。

不安や強迫観念が語られるものの、彼が、彼だけが彼の目にみている歯車は、閃輝暗点（せんきあんテン）と眼科は診断するだろうし、これが偏頭痛を引き起こす。いつ死ぬかわからない狂気にはなり得ない。母が精神病だから芥川も、いつ発狂するかわからない恐怖があつて歯車を、前兆と捉えていた。いつともわからないいづれの、発狂におびえた。

レインコートの男は、現代では、正体不明の不吉な姿として、いまでは使われがちな表現だった。前兆や兆しはオーメンと英語でいうように、映画でよく見掛ける。不吉なものは雨と一緒にやってくるものも多い。ピエロに黄色のレインコートのは、シックス・センスの精神科医のブルース・ウイリスはオーバークートを着ている。日本では雪女や貞子の白衣を浮かべやすい。芥川がみていたのは、雨のなかに素顔が不明のまま、すぐそばに立っている、貞子のようなものだろう。歯車にしたって、窓ガラスが銃弾を受けてヒビ割れたようなカタチが視界にみえるアレのようなものだ。

窓ガラスには、ぼくがいる。（歯車もなく皮膚はあつた。）

## 2-10 電車

ひとみ（ずつとじぶんを受け入れないでやってきたのがよくなかった。）なにをしたいのかわからないまま、ふりかかるものすべてきつとクジ運なんダって、それでまあまあやってきちゃったというか。服はローテーション考えなくてもたくさんあるけど、服たくさんでも結局、着ているわたしの手と足はどうしたって二本しかないし、服は脱げても身体は脱げないもんだから…（フツと寂しく笑う。うん、とひとり合点で頷く）立ち止まって、じぶんをちゃんと知ろうと思ったんです。はい。

じゃあとってなにから手をつけて、いいか、わからないわけで。（スマホに話しかける）オススメの曲を聴かせてください。

間。

無駄グチなく、ただ静かに流してくれる。コイツから、プレゼントされたのは、ノラ・ジョーンズ？ ちよつといいオンナ。「One Flight Down」って曲らしい。でも、歌詞ゼンゼンわからないわけで。でもゼンゼン、メロディー、すーっ、してみて。（しみて）きてしまった。

チサト 「悪いところがあつたらいつてほしい、直す」夫の声が蘇る。じぶんでもなにが苦しいのかうまく掴まえないまま、一年くらいかけても、じぶんの正確なキモチのわからないまま、もう暮らせないとクチにってしまった。クチにしてからはもう、やり直せなくて、どうして苦しいとか、じぶんが削り取られてじぶんがなくなっていくような気がどうしてもするとか、いまでもだれかに説明できる気がしない、し、夫もだれかに説明できるほど悪いところがあつたわけじゃない、し、悪いところはむしろなかったと思う。わがままをいって、いい続けて、でも息苦しくてたまらなかった。

時々逢ってるのと、一緒に暮らすじゃ、ゼンゼンちがつていた。おいしいですかと聞かれて、おいしいと答える。聞こえはいいけど、ことによると、味覚がない返事だった。感覚も感情もない、ただのうわつづらな、おいしい。ありがとう。おはよう。ただいま。身体大丈夫？ 胸のなかガランドウで、恋も愛も嫉妬も悲しみも憎しみも、こみ上げるような喜びも、もうなんにもなくて、わからない知らないうちに、あちこちヒビ入ってて、なんかたぶん、あと一押しで、たぶんもうすでに、ガラガラなにもかも崩れて、崩れてしまいそうで、そんな家に帰りたいですか、あたし。

## 2-1-2 地下鉄・車内

リナ いつか節電態勢が暗黙に敷かれて、あんなにクツキリ目にみえて、暗(くら)って、街中薄暗かったのに、いまでは、いつでも煌煌としている。地下の深いところを走る電車で、こんなふうに乗れるのも煌々のおかげなんだけど、でも、なにか解決したわけではないのに、流れ去ってしまったって、忘れられてしまった、すべてマボロシだったよう。あの頃のデパートや百貨店の、一階の、ビューティコーナのあの一体は、ザアマミロだった。いつも、なにもかも電気でキラキラ輝かせて、5・6・7倍も顔をキレイにみせて、透明感あるとかみずみずしいとかなんとか、ライトのハレーション効果でしょ所詮、そんなこと頭のなかで高速でつぶやいているのはあたしの常日頃なんだけど、だから、節電の薄暗いなかでみる、あなたの顔は、ご覧ください、クマだったりほうれい線だったり、顔全体がゾンビみたいにみえて、ゾンビにしかみえなくて、生きてるのか死にかかっているのか、生き生きしてナイまぎれもない、オマエの姿だよって。暗いなかでも鏡はありのままを映すことには冴えていて、教えていて。ふうん。(映るあたしの顔だっておなじ)

静かに賑やかな中吊り広告たちたち。令和にオリンピック。(街に)林立して太り続けて、輝きが増すほど、ガランドウな空虚さ(を感じる)。ゲンエイ。何兆円かけて、気の抜けた、ぼんやりした街になっていくし、あたしのこの先の未来だつて、結局のところ闇雲。(不安に押しつぶされそうになる。)(また、ゆらゆらした気持ちになってくる)

はやくなにもかもがどうでもイイと思える日が来てくれればいい。

2-13 ホーム

川島 時計はもう、24時を越えていた。ひとりきりになりたくなかった。だれかを待っているフリをして、駅のホームの柱にもたれかかったまま、目のまえの光景を無心で、なるべく無心で眺めていた。家にはまだ帰りたくなかった。

2-14 電車

ひとみ ジョーンズのわかんない歌詞にもしやきつと、意味あるよねあるよなあ。るにちがいないですっだって、ぐうぜんプレゼントフォーミーなんだからって、歌詞を検索した。

わたしの心は、その音を捉えて

じぶんのアヤマチに気づく

ケムリのように 絶え間なく そこで鳴り続けていた

そこで流れていた曲

わたしは気づいた わたしを見い出す――

目を閉じる。(聴いていると) なにもない広々した空間だった。ほんとうに広々して、仕切りもなく、壁もなく、天井もない。安らかな音楽が世界を塗り替えてくれて、ひとり、ちがう空間にいるよう。なんかフシギ。音の響きに身を任せた。

2-15 ホーム

川島 無心でいたいのにな、どうしてか、考えることを消滅できなかった。考えるべきことから逃げて、目のまえを通り過ぎるだけの見知らないヒトビトを眺める。まるでぼくが、駅の無色の背景かのように、みえていなかった。(あの)監視カメラにも映ってないかもしれない。

いっそ自由になりたい。乗って、さらに奥の駅、もっと奥の駅、そしてどこかへ。行こうと思えばいけるのに、実際どこにいけばいいのか思いつかなかった。

2-16 電車

まる 無数の、ちいさなちいさな光の数珠で織り成される、文字ことばたちは暗闇に放たれる。ヒトによって相手によっては、心を、身体をも満たしてゆく。手のひらの、遥かなるセカイ、マボロシのごとく、韻を踏む。踏んでないけどね。笑いたくなる。

どうして。

しあわせな気分。笑いたくなる。

間。

まる あ？ 川島君？ え、いつからいたんですか？

男 まるさん。目。合わせないのって、どうなんでしょう。

まる ……まあ…はあ。

男 別にイイんですけど。

まる (時間かかってその方角見る)

間。

まる 瞬間でしか捉えられなかったけど、気づいた。髪切ったんだ。ああ、用事つてこれだったのかな。あと。耳。川島君の耳。良かった。カタチよかった。またみたいと思った——、  
というのはきょうの出来事で、だからいま、ちょっと、耳がみたいです。耳みたい。耳みたい耳みたい。電車のなかの目のまえに座っているヒトの顔の、耳みて、いまも強く(そんなことを)思った。

2-17-1 電車

チサト 明かりのついた部屋を消そうとしているあたし——

2-17-2 電車

ひとみ 引き続き、ノラジョーンズ——

2-18 ホーム

川島 電車は6分から8分から10分おきにやってきて、無数のヒトを慌ただしく吐き出して、無数のヒトビトを乗せたまま去っていった。これだけ多くの数の人間が、じぶんの帰る場所のあることに、あらためておどろく。カタチと色のおなじ車両がこれだけ多く存在していることにもおどろく。だれもが行くべき場所を持っていた。

まる メール。スマホとにらめっこ。どんなことばを選んで、どんなことがらを伝えたくて：わからないから、画面は真っ黒になって、あたしの顔を薄暗く写す。つながり方って、簡単になったけど、なおあたしにはむずかしい。

間。

まる え、どうして川島君がここに、この駅に、この時間に、すぐそこに、もつとすぐそこに、目のまえに？ と心で思ったけれど――

(あたし言う) 雨だね。(川島云う) 雨です。(あたし言う) なにしてるのここ。(川島云う) 家ここなんです。まるさんも？ (あたし) ウチですかウチは…え、あ、あー、(川島) や、なんでもないです。なんかすみません。(あたし) え、あ、あー、(川島) 貸しますよ。(あたし) あ、ありがとう。(川島) うち近いんで。あそこのマンション。ほら。(あたし) あ、あれ？ (川島) グリーンのカーテンっぽい明かりの、上から三つ目の、左のほうの。(あたし) えわかんない、どれ？ (川島) アレですよアレ。(あたし) あ、あ。ちよつと淡い、控えめな光のところ？ (川島) です。(あたし) え、あんなイイところに住んでるの川島君？ (川島) いえ。アレ。どんなヒトが暮らしてるんでしょうねえ。(あたし) んんええ？ んエ？ はニヤアー。じゃあと(いつて) ひとりにさせた。(見上げる) マンションをなんとはなしに眺めた。知らないだれかの暮らす部屋をユビさして、一体なにしたかったんだらう。傘がちよつとあつたかい。みみ見逃した。(でも) また機会をつくれそうだった。(やがて去る)

2120 ホーム、駅前

川島 ドアが開くなり慌ててホームに嘔吐する姿(があつた)。スマホをいじるフリをして、知らんぷりで、ただやり過ぐす。さっきの小説の影響か、ぼく自身にも吐き気を誘ってくるようで、(だから) やり過ぐす。電車から吐き出されたなかに、まるさんを見掛けた。いつも下を向いていて、おなじフロアで部署はちがうけど、ストリートネックのサンプルとして、噂されているまるさん。まるさんまるさん、みんながそう呼ぶので苗字を知らない。ストリートなのにまるさんなので、小馬鹿にしている雰囲気があつて、気にかけて、時々話しかけていた。けど、あまり目を合わさないタイプなので、話しかけちゃいけないかつたような気がして、してしまつて、気づかれないよう背中を向けた。(ふと思つて) 駅おなじだったんだ。

間。

雨が強く降っていた。駅前立ち往生のなかにまたみつけた。まるさんもいまは見上げている。視線がかち合ってしまったので、話しかける。

間。(だれも動いてはいけない間)

おどろかす積もりなかったけど、おどろいていた。ひとりでいたくないから話込んでもよかったけど、下を向かない顔を見てみたくてちよつと話してみようとしたけど、会話続かないので傘を貸して、じゃあといって別れた。

## 2121 駅前

ひとみ 個人メッセージが届いていた。夜風が冷たいし、ヒトのぬくぬくそろそろほしいなあなんて、ちよつと思ってしまったので、一度お会いしてみませんか。ジョーンズの響きにウットリ身を任せて送った。

駅に着いたらけっこうな勢いの雨だった。傘がないので、舌打ちを3回かまして、聴きながら家路を急いだ。(去る)

## 2122 電車

リナ そばに立つ、若い背広はさっきから、返信くればすぐ返信、やりとりを繰り返す。ニタニタ顔は赤い。音がイヤフォンから漏れていた。「身を獣に変えられなために彼らは酔う」ボードレール。「穢らわしい大都会」。(学生時代以降から、読むことの絶えていた詩集を思い出させた)

あたしは、この生き生き活気に満ちる背広に比べたら、間もなく死に際の顔なのだろう。死——若くて、元気で、肌なんかもウソみたいに若くて、もしかしたら十八歳ですよってダメせるってくらい、頭のとっぺんから足の先まで元気ゲンキであたしは若いのだから、だから死に際といっても、こわくも恐ろしくもない死に際で、深刻さとは程遠い深刻さで、でも死んでしまいそうな死の際にいて、自分に身を任せちゃえば、電車を止めることもできて(止まれ、と思い止まって)——見渡す。居場所がない。アリのように群れている都会にあたしの居場所がない。五年続いている(あたしの)好きなヒトは、キモチが傾いてくれなかった。距離が縮まれば縮まるだけ拒絶された。もう…疲れた。(いないままそれでも生きていくのが、いまはつらくてかなしい)

音が漏れてくる。(こんな曲じゃない)なにか救いになる曲だったらっていつそ思う。音楽よくわかんないから、いつそ、ことば。チョコレートの溶けたような、どろり心を沈めてくれるような、ことばがほしい。励まされるような、わけわからなくても納得できるような、気晴らしになるような、笑っちゃうような、なん

でも。キリストブツダマホメツドなんかじゃない、なんでも、なにか。

記憶の引き出しから、ことばを探す。思い出すよう。

リナ (取り憑かれたようにクチが走る) ——「あなたは抽象的で、雲のように美しい人です」……え、なんでこれ。だれだっけ。(いま一度) だれだっけ。ことばを探す。ひとりの閉塞を破るような(ことば)。

間。

リナ ——ことばでだれかに説明できないから、どんなに呼びかけても、だれにも届かない。だから、空に向かって、あたしの全部を投げた——

間。

リナ この電車のなかに、これだけの人間が乗っているのだから、たまたまだれか、波長のあうだれかがいて、いてくれて、だから(あたしが)心のなかでウンと叫べば、せめてどこかの、どっかの何両目に乗っているだれかには、せめて、つながると思つて、思うことで、知らない遠くに向けてただ、届ける。放つ。(虚空に問う) あなたは生き生き生きていますか——。あたしは彷徨ってます。

## 2123 電車

チサト (終電の) 窓の上に映り続ける、あたしをみると、なんだか、じぶんが、じぶんじゃない、見知ったような見知らないような、タニン(の顔)にみえてきた。

このニンゲン——なるべく詳しく、みようみつめようとした。

——え？

時間の感覚が間延びしてゆくのか拡大してゆくのか、なんか、セカイの歯車の、磁場？がゆらゆら揺らいだような気がした——

(あ)らー。

音が遠のいていた——

ひとり。

真っ暗い。

暗くて深いコレは、はるかまで際限なく真っ暗に伸びている。でも真っ暗なので  
はるか向こうがすぐ目のまえにそばにあつて、まるで壁みたたくすぐそばに密接し  
てるようでもあつて……空間の広がりをつまづつかめない。

まるで真っ暗闇が、無限に膨張しているよう……。

視力は1・5。まあまあいい。ラガン。

裸眼の目で、壁をみる。深い闇のクウカンを捉える。

ムゲンのウチュウを感じるよう……。

どれだけ遠くて、どれだけ暗くて、どれだけ広くて、どれだけ重くて、塗りつぶ  
されたみたいに暗くて深くて、なにもない、この……、急にできてしまった真っ  
暗闇？に連れていかれてあたしは、うまく受け止めきれないあたしは、

微かになにかを感じて、見上げた――

見覚えのある都会の街がそこに一瞬、またたいて、また、またたいて、消えた。  
ような（気がした）。その一瞬間のなかに、見覚えのあるレインコートのあるヒト  
を捉えた、みつけた、ような。

（口だけ）「――」

響かない。

（口だけ）「――」

響かない。

このただなかに、暗くて不透明な無限のウチュウのただなかに、あたしは、あな  
たの名前を呼ぶ。

（口だけ）「――」

溶け入るように消えていく後ろ姿、みたような気がした。

2124

リナ もしもし？

チサト もしもし……

リナ もしもし？

チサト ……もしもし？

リナ 声。

チサト はい。

リナ 聞こえるんですね？

チサト 聴こえます。

リナ (はい。あたしも) 聴こえます。聴きとってます。

チサト あたしも。聴きとってます。

リナ もしもしって。変ですね。

チサト かも…しれませんがね。

リナ (ですね、という語調で) はい。

チサト はい。でも、もしもし(どいっちやいます)。

リナ はい(どいっちやいます)。もしもし。

チサト もしもし。

チサト フシギ。

リナ ほんとう。

リナ あの。

チサト はい。

リナ 生きてるヒトですか？

チサト (思わず笑って) 生きてると思います。はい。

リナ よかった。オバケかと思いました。

チサト オバケだったら、きつと…やさしいオバケです。

リナ 安心してもいいですか。

チサト はい。あたしもいいですか。  
リナ ぜひ。(笑う)  
チサト (笑う)

チサト フシギ。またいっちゃう。  
リナ いっちゃう。

チサト きつと。

リナ はい。

チサト 騒音のなかにも静けさがあつて。

リナ ……？

チサト 騒音のなかでこそ聴こえてくるような静けさ、ね？

リナ はい。

チサト 横断歩道で信号待ちの時、渡っている時、電車に乗っている時、エレベーターに乗っている時、

リナ はい。

チサト そこにだれかが一緒にいるのに、だれもことばを発していない。あの時のような奇妙な、静けさがここにはありません。

リナ はい。

チサト あの静けさの気配に気がついた時と似ています、ここは。

リナ (考える間あつて) 似ています。

リナ どこにいますか？

チサト 東京です。

リナ (間あつて) 近いですね。

チサト 東京ですか？

リナ 東京です。

チサト フフ。

リナ え。

チサト 宙から声が届いてきたのに、近い。

リナ ホント。

チサト 神秘的だったのに。

リナ うん。

チサト シンピ台無し。

リナ ホントだ。(笑う)

急にドアを叩く(ような)音。簡潔に連続して響き続ける。  
敏行、目を覚ます。

敏行 叩くだけかがいた。おれの部屋のドアだった。夜遅くまで走る中央線。この沿線の暮らしは、終わらない日常で、時間の感覚が時々わからなくなる。(時間を確かめようとして) スマホが見当たらない。部屋の時計は電池を切らしている。合鍵を持った相手がまだいた頃まで動いていた。(あしたを感じさせない響き方で) サヨナラいわれてから何年放置したかわからない。

(ノックの音に) この音は遠慮がない——ツンとして冷ややかで、タワーマンションが似合いそうな、となりの若い子が、助けを求めるとも考えられなかった——だれかが呼んでいる。(でも) ドアはおれしか開けられない。おれが開けなければ、ノックで求めるだけかは、叩き続けるか、諦めるしかない。

布団をかぶって、両手で塞いだ。耳を、目を、閉じる。(でもノックを消すことはできなかつた。) 音がおれを追い詰める。

音が途絶える。

沈黙。

敏行 止んでいた。いまさつきか、寝てしまったか、どれほど時間が経過したのか手応えなくて、いつ止まったのか：わからなかつた。

あたりは月の裏側のように静かだった。映画「ファースト・マン」を観た。月に着陸する宇宙飛行士の物語で、月面が不気味なほど、とてつもなくただ静かだった。

ドア向こうに、耳を澄ませる。

この沈黙のなかに、無音の音を、聞き取る——

敏行、強烈に激痛が耳に走って、反射神経で反応する。

敏行 また響いた。しつかり耳に響いてくる、あまりの間近さ。

ノックの音を聞いている、耳もとで。

敏行 耳に届いてくる。おれを求めてくる。(身体をくゆらす) コンともコツともちがう、あまりに間近にくまなく響き渡って、叩いて叩いて、おれの心の扉を叩いてくる。

フト感じた。なにかの音波なのか。犬の耳がいろんな角度に反応しても、ヒトにはなにも聞こえないときがある。犬、ネコ、昆虫、コウモリ、ゾウ、(シロナガス)クジラ、イルカ、音波でやり取りしているという。実は、ヒトは本来、他人からの音波(のような音)を、感じ取る能力を持っているんじゃないか(と思つた)。(ちよつとの間)でも音波かわからない。耳元で叩く音があるだけだった。

…どうせだったら、じぶんが求めたい、いつかの忘れられない相手が叩いてくれてたら。すこしそんなことを願ってしまった。

312 部屋

ヨガをしているなつのそばに、川島が寄る。

なつ (問い詰めたい思いで) おそかった。

川島 連絡なんども。ごめん。

なつ (ほっとする気持ちもあり) おそかった。

川島 ……

間。

なつ (帰って早々こんなことをいう自分に嫌悪を感じるが) まだぐらつく?

川島 ……

なつ (ああいやだと思うがいつてしまう) ここまできて、まだぐらつくか?

川島 ……

なつ みて。

川島 ……

なつ みる。

川島 みる。

なつ |

川島 みるよ。

なつ 愛するんだ。あたしを愛せ。

川島 ……

なつ 腰を決めろ。

川島 ……腹?

なつ …、腰決めて、あたしを愛せ。

川島 わかってるよ。

なつ わかってない。

川島 確認必要?

なつ 必要。

川島 (苦笑) 隠してるんだ。

なつ 隠れるな。隠れる理由なんかない。

川島 ……

なつ こっちはドンドン隠せない。

川島 ……

なつ いったら、いわれるよ。

川島 いったらって、なに。

なつ おめでとう。おめでとう。

川島 ああ。

なつ おめでとー。へええおめでとー。おめでとう。

川島 ……

なつ (でも一方あたしはといえば) ありがとうございますって複雑。

川島 ……

なつ 生きてくのってタイヘン。(あたしは)ちゃんと生きてけるかなーって思ってる。

川島 うん。

なつ 産んで育てるチカラ自信ない。そんなパワーあるのかなーて。

川島 うん。

なつ ここ、心細さ混じってるから複雑。

川島 いいたいこというよヒトは。

なつ ありがとうございますって。いいたい。

川島 ……

なつ いいたい。

川島 ……

なつ いいたいんだよ？

川島 うん。

なつ ……うんばっか。

川島 うん。

なつ 腰決めて。

川島 ……覚悟？

なつ どうぜん。

川島 ……

なつ あと二週もない。

川島 え。

なつ えって。(まえにも) いったよね。

川島 ……

なつ ねえ。迷うのなんで？

川島 ……わかんない。

なつ |

川島 ……わかんない。

なつ 望みがあるんだよ。理想があるんだよ。だから…(哀しき溢れて)ダメって

思ってる…。(でもね) 辛抱しろ、我慢しろっていつてるわけじゃない。ひとつ

どころに閉じ込めようとしているわけじゃない。

川島 ……

なつ |

川島 ……

なつ たとえ悪いけど、まっとうなら、これは理想じゃない本来したいことじゃない、あっても、ひとつひとつ、目のまえを大事に片付けていく。まっとうな人間

ならね。

川島 ……(どうしようもなくして自嘲)

なつ 笑うな。

川島 ……

なつ (見ていう) つかみどころないの。どうして。

音――

川島 入るね、風呂。そと雨だったんだ。(行く)  
なつ ……今更ぐらぐらするなよ。

3-3 ホテル・喫茶店

ひとみ、入ってくる。

ひとみ ―― (探している)

敏行 (立ち上がり、手を上げる) ……浴衣…さん?

ひとみ (気がついて、シヨックの間あって) ……ゴリアテ…さん?

敏行 ……。 (ああとと思うが、どうも、と一礼)

ひとみ ―― (おなじく一礼する)

ひとみ、敏行と向かい合って座る。

敏行 はじめまして。

ひとみ ゴリアテっていうから…テツキリ…、

敏行 (不平を言われると構えて) ……え (なにか)?

ひとみ (ラピユタの雄大なイメージを手で) こんな感じのヒトかと。

敏行 (意味が掴めず) それはなに (を) ……?

ひとみ ラピユタみたいなヒトかと。

敏行 (まだ掴めず) というのは……?

ひとみ ひとくくりで…… (吹き出す) ホントですね。

敏行 まあ……なんだろ…ジブリは好きだから…ちよつと…面白いかなと…

ひとみ 面白いことが…お好き…なんですか。

敏行 まあ…寄席とか休みの日には。落語が好きで。

ひとみ (間あって) へー

敏行 (苦笑)

ひとみ 面白いヒトなんですか。

敏行 それは、判断してほしいっていうか…じぶんっていうとハードル上がるでしょ。

ひとみ まあ。

間。



ひとみ お互い、わからないことばかりのほうがいい？  
敏行 まあ。はい。

ひとみ でもゴリアテさんのこと、知りたいと思ったら、どこで生まれてどんなところで育ったんだろう、どんな学校でどんな友達がいるんだろう、どういう仕事しているんだろう。こういうこと、聞きます。知りたいなら聞くのは…自然です。  
敏行 まあ。でも。だって、がんばれますか？

短い間。

ひとみ がんばれないと思います。

敏行 (うなづく)

ひとみ はい。

敏行 だから、

ひとみ はい。

敏行 街かどつかで、お互いみつけても、あのおれですわたしですっていわなきゃ、わからない。そんなふうで。

ひとみ はい。その時はもう、あれ、だれでしたっけ？

敏行 そう。妙かもしれないけど。お互い、だれでしたっけ。

ひとみ 知らないまま。

敏行 知らないヒト。

間。

ひとみ ひとつだけ(いいですか)。

敏行 はい。

ひとみ こういうの、何人目ですか？

敏行 ……片っ端から会いたいと返事するんだけど。からつきし。

ひとみ わたしも。

敏行 (そう)ですか？

ひとみ 片っ端からわたしも。まあぜんぜん。

敏行 へー。

ひとみ でも贅沢でも、それなりに夢みたいんで、シンチョー。

敏行 そう。

ひとみ フシギとね、

敏行 はい。

ひとみ 季節の変わり目だけ、なんでかちよつと…たまらなく…ひとりているのがイヤになって。

敏行 はい、そういうこと、はい。冬だし。

ひとみ フフ。

敏行 え？

ひとみ 偶然には意味がある。だから、単なる偶然で片付けちゃいけないんだッ。

敏行 ……

ひとみ 偶然に偶然した意味を探すと、実は、心が望んでいたことだったりする。  
——偶然には、ひそかな願いが実現されている。そうだ、きまり切ったようにしか人生動かないと思っているココ(頭)、いま揺さぶってくれているんだ、揺さぶれ、揺さぶられるっ。らりるれる。

敏行 ……

ひとみ フフ。だけどまだ、夢みたい。

敏行 ここ出たらもう、だれでしたっけ。

ひとみ そう。だれですかっけ。

敏行 なにもなかった。はい。

ひとみ はい。

敏行 残念だけど……。

ひとみ はい。残念ですが……。

間。

敏行 せっかくですし飲みませんか。

ひとみ 飲むって、お酒？

敏行 (いえ) 店員がずっと(視線)。

ひとみ (おっと)

314

リナ 今年の10月の3連休、台風16号は甚大な被害を及ぼすとのことで、関東圏の電車すべて、運休した。過去最大級というソノ、不可抗力の訪れを、固唾を飲んでNHKを視聴していると、渋谷のスクランブル交差点の映像に、オトコがひとり、半裸で、タヌキのようなお腹を出して踊っていた。目立ちたい陽気なバカで、しようもないクダラナイだけかなんだけど、でも、この世の「終末」を迎えたような、無人のゴーストタウンで、ニンゲンが、ひとり、裸で踊っているの、フシギと、晴乞い(はれごい)、か、雨乞い(あまごい)かを、感じさせた。昔、あたしなんか生まれるずっと昔、太鼓を叩いて、神に雨を乞うていたそう。天に届くその、太鼓の音(ね)の願いの切実さが雨を降らせたという。台風という自然の不可抗力の訪れを、あたしは無力感のなかでつまらなくテレビを眺めていたので、だから激しく願えばまるで、天候をも動かせるという、古いニンゲンをみた気分だった。次の日は抜けるような青空が広がっていた。日常が日常として続くことに感謝して、タヌキのお腹のカレにも感謝して、空を仰いだ。

あたしは……人間の姿カタチをしたキツネに化(ば)かされた。電話・メール・声かけあって、親しくなりたいキモチが湧(わ)いたり激(よど)んだり、水たまりのようになって、知らずして取り憑かれて、いつの間にか騙されていた。信じて五年待ったあげく、孕んで、産めないとなって、そのさき相手は酷く無責任だった。医療費も手術もぜんぶぜんぶひとり処置した。大切な身体をこんな

された腹立ち、自己嫌悪の動揺は、忘れていきたいから、相手とはそれきり離れた。連絡もこない……。辞めてしまった仕事はアルバイトでもいいからみつけたいし、東京に居場所をみつけない。このまま死ぬに死に切れないから生きるんだらうけど、生きてたいのか、わからない。アパートの隣のような、コケ生えたウラさみしい人生はイヤだった。

声だけで繋がったあのヒトとは、あれ以来つながらない。詳しいこと聞かないお互い、クチ約束した。検索すれば個人を特定できたりする時代に、あえて透明人間のようには、面影のように、正体不明のまま居ようと誓った。この現象を合理的に説明できない。(テクノロジーが進歩しても)他人の心の声がダダ漏れの洪水で聞こえてほしくないから、彼女だけが特別と思っているし、思いたい。

「ベルリン 天使の詩」という映画がある。人間を見守る天使は、冴えない中年オトコの格好で、レインコートのようなロングコートをまとって街を歩き、だれかれなくヒトビトの心の声に、耳を傾けて、聞き取り続ける。彼らは天使とも霊ともつかない「霊的な存在」だった。心の声を聞くうちに、人間に恋に落ちた天使の話(だった)。天使は、いい知れぬ不安を募らせるヒトの、つらい瞬間を迎えているヒトに、手を、触れたり添えたりして苦しみを和らげていた。人間世界を天使の視点からみつめたこの映画は、平凡な(人間の)生き方のなかに、ちいさな生きがいを見つけるのが人生の真実だと教えてくれた。

カーテンを開けて外をみる。いろんな暮らしのあかり。鮮やかさとおおきさは色々だけど、輝く色彩だった。

### 3-5 部屋

チサト じぶんひとりの時間つくって、心の安定を取り戻したり、相手との距離の改善をすこしアテにした。けど、夫婦仲と入力して検索して、いろんなサイトを眺めていると、必死になって読めなくて、読んでいないじぶんに気付いて、たちまちわかった。好きじゃないんだ。好きじゃないんだ。好きじゃない。さからえないキモチだった。虫がいいようだけど、飽きたんだと思った。

ひとり静かに過ごす日曜は、テレビもつまらなくて、映画も行きたくないし、本読むと寝ちゃうし、ただぼんやり過ごして、だれとも会わない。冷蔵庫にあるものと、スーパーで買うものを頭のなかでリストアップした頃には夕方だった。じぶんが削り取られるとかいっておきながら、ダラリして一日が終わっていく(と思うと、情けないキモチになる)。遠くから廃品回収の車のアナウンスが聞こえてくる。この部屋には、ヤカンに鍋とベッド以外ほとんどなかった。荷物少ないのは、この生活が二年三年と続いていくんじゃないかと、ただの「途中」、途中なんだと自覚しているため。どこに向かって、なにに繋がっているのかわからないけど、なにかどこかへの途中。腕まくりする。足を前に進めなきゃ。いい聞かせる。さてこれからどうやって生きて行くか。ひとりでどうやって悔やまないで生きてやろうかって。そんなこと考える。

夫には情はあっても恋はない。なくなっていた。仕事を続けて、その給料でお互

い過ぎでいた。ときどき家を整えたり、食事を供給したり、されたり。恋だけじゃなく、性交すら、ほとんどなくなつた。あれはいつからだろう。さみしいとは思わなかつた。けど、でもさみしかつた。避け始めたのはコッチと思うものの。ボツ交渉になつたまま、このままこのヒトと死んでいくのも仕方ないと思えたけど、でも、だれか、別のヒトだったら…別の男性との可能性もなかったら…さみしい。ものすごくさみしい。性欲は…まだ消えない。ときどき、火照る身体から、みだらな想像をしながら、じぶんでじぶんを解消させたりすると、濃くてドロリとしたものが溢れ出る。解放感はなく、ただみじめな行爲だった。下着全部脱いで姿見のまえに立って、裸のじぶんをみて——魅力がないとは思えなかつた。

間。

——また（声が）届いた。

316

リナ もしもし。

チサト ……。

リナ いますか。

チサト います。はい。

リナ （とてもホツとする）

間。

リナ ちよつとだけ（いいですかいま）。

チサト ぜんぜん。話せたらいいな、思ってた。ひさしぶり。

リナ ひさしぶりです。

ちよつとの間。

リナ なにしてみましたか。

チサト 裸になりました。

リナ ……へー。お風呂ですか。

チサト ううん。裸になって、見惚（みと）れてた。

リナ スタイルいいんだ。

チサト どうだろ。

リナ （笑う）いいんだ。

チサト ウソウソ、ゴロゴロ（して）さみしがってたところ。だから、いまいい。  
リナ 裸なんだ。  
チサト 寒がりなの。（だから）ちがうの。  
リナ どーだか。  
チサト （笑う）

間。

チサト ね、どうやったら繋がるの？  
リナ わかりません。あたしなんでも願ったし祈ってたけど、やっどです。  
チサト （とても残念に）そっかー。  
リナ はい。（コツ）わかんない。  
チサト まえにね、話したくて。強く思ってた。ダメだった。  
リナ そうですか。  
チサト なんだらう。

間。

リナ ただ。鏡に映るじぶんが本当の姿じゃないようにみえるときがあつて、  
チサト え、うん。  
リナ じぶんをどう捉えたらいいかわからない、そんな馬鹿みたいなことがあたし  
にはあつて。  
チサト ウン。（ある）。  
リナ （うなづく）そういうとき、（あたしは）足がすくんで、だんだん、じわりじ  
わりじわりじわり恐怖が、胃の、底で、動くんです。  
チサト ……  
リナ そんなとき、呼びかけてます。（あとは身を任せます。）

間。

チサト お互い、あれこれ詮索しないけど、  
リナ はい。  
チサト 友だちすくない？  
リナ はい。  
チサト （おなじと思うので、なおのこと）繋がれて。よかった。  
リナ はい。

間。

チサト 宙っていったけどね、  
リナ チュウ？  
チサト 宇宙。あたしたち（の声）。

リナ シンピ。  
チサト そう。

リナ はい。

チサト 足の裏に顔があるって（いうじゃない）。

リナ え？ 足の裏に？

チサト 指圧。足裏マッサージ。いく？

リナ こわくて。

チサト グツと押して。声なき声でイタタタター苦しんでると肝臓が、とかいう。

リナ はい。

チサト お酒飲みますか。とか聞かれて。

リナ ツボ？

チサト そう。

リナ 図解。フットチャート。

チサト そうそう。胃、呼吸器、心臓、目、

リナ 目って、目？

チサト そう。アイ。

リナ 足の裏にも目があるんですか？

チサト ないけどある。足の裏と全身はつながっているの。

リナ はい。

チサト 耳もある（足の裏に）。

リナ それも、ないけど、（耳）ある。

チサト そう。

リナ はい。

チサト あたしは、足の裏の、目や耳で、あなたを感じてる。

リナ 天地逆転。

チサト フフ。たとえヘンなんだけど、そういう、ふだん使わない知覚であたしは

あなたを感じている。地面にスーって音もない、ポツカリ大きなアナみたいな空

間あって、身体が沈んで、浮いてて、音もない、あなたの声だけが聴こえる。

リナ （間あって）ふううーん、

間。

リナ （この声と存在が）指圧の世界……。

チサト 五臓六腑、陰と陽。光と陰。東洋医学では、気と血と水が、体内を循環し

てると考えられています——

リナ おおっと？

チサト 気は、存在のエネルギーとされています——

リナ はい。（続きを）どうぞ。

チサト 全ての存在は、気によって、宇宙の生成から生命の現象まで、説明と解釈

ができるとされています。気とは、この世界のあらゆるものに宿り、そして満ちあ

ふれているものであります。ありますそうです——

リナ それはそれは。

チサト (以上) ウィキペディアでした。  
リナ (間あって、思い出したように笑う)  
チサト ん?  
リナ そんなの(現実的なこと)持ち出さない(約束)。  
チサト (間あって) 持ち出さない。そうね。フフ。

間。

リナ 指圧じゃなくても。  
チサト うん?

リナ あたし、身体全身で繋がっているって、考えたことないことに、いま気付いています。

チサト ……うん。

リナ 手のひら(にもツボがあります)。

チサト ……?

リナ 手のひらの耳で、目で、あたしはみえています。聴いています。

チサト 胃じゃなくて?

リナ 胃じゃちよつと。

チサト うん。

リナ (手をみて) みえないけれどみえる世界がここにあります。

チサト (足に傾注していて) ——

間。

チサト ここにいるよ。

リナ ここにいます。

317

なつ なつ。ひらがな。匿名の、個人の特定されないネーム(のアカウント)で、みえない大海原大宇宙に、反応ほしいとか関係なく、思いの丈を放つ。日記みたく綴られ続けているタイムライン。吸収するだけ吸収してくれるブラックホール。諦めよう、信じよう、でも時間差し迫る。諦めよう信じようでも時間、ぐるぐるグラグラ揺れて、トライアングルの渦。楽器を思い浮かべる。一本の棒でできて、みつつの角のひとつは閉じられていないアノ、トライアングル。空いた穴から、こぼれ出て吐き出されることばたちたちたちたち。外国に、天使がトライアングルを演奏している絵画があった。似たようなオーナメントもクリスマスツリーの飾りに見掛ける。あたしというひとり人間の、いま天使に演奏されるなら、どんな音を響かせるのだろう。

ひとみ メール。ジブリさんへ。お礼メールです。どうかお気を悪くなさらないでください。(お礼) ついでに、本名、年齢、番号、勤め先、仕事内容。個人情報まるっと送ります。さようなら。お元気で。

また会いたいか思っただけに(ジブリさんに)送った。おっさんやただけど、でも、目を閉じて、みつめてみれば、ヤな感じはしなかった、おっさん。

いま、じぶんの居場所のようになった、なってしまった行きつけの中華料理屋にいる。あれからたまたま何人かの男とマッチングして、でも鼻につくというか、耳ギスギス響いて痛いというか、グイグイくるンで、どいつもただのメイワクだった。(わたしは) かいぶつを引き寄せる星運勢…みたい。どうせかいぶつならいつそ、とか思っただけ、ジブリさんにさらにメールした。メール、ゴリアテさんへ、スリーサイズを教えてください(くちだけでいう)、バスト一〇〇、ウエスト…ヒミツ、おしり…むふ。

ドキドキして返事を待った。深い意味なくせに。ドキドキしていた。

敏行 浴衣さんからメール。個人アドレスがあった。住所があった。勤め先のように都内の大きいデパートの…3階だった。…無用心だと思った。信用されてることも思った。立ち入らない、なにもない。虫のいい話をしたから、これ(個人情報)に戸惑う。街を歩けば、よそのほかの知らないだれかの顔を見ていた。浴衣さんの名前も知ってしまった。もったいないことをしたのかもしれない。「」。」「ゆかた」…さん。歳のせいか気が急いてもいたけど、釣り合う気がしなかった。(スマホをみる) 想っているときまた浴衣さん(から)。一〇〇…。

3-8

まる 傘を川島君に返した——意を決してメールして、都合きいたら昼休みを指定するので、紙コップのコーヒーをふたりで飲んだ。あたしのランチ、パンのミミをあげて砂糖まぶしたデータラメな手料理を面白がるのですこしあげた。たくさん笑った。話したいこと聞きたいことあったけど、ことばは思いを裏切って掴みどころなかったけど、たくさん笑った——

川島 下向いてるのなんでだろうって思っていました。

まる (ごまかし笑い)

川島 腰ですよね？

まる (ドキリして、笑って) え… (川島をみて、同意の意で) はい？

川島 (ぼくは) まるさんみると、ヘルニアを意識します。

まる …ヘルニア？ (ええ？という含み笑い？)

川島 なりやすいってこの体型。症状コレかなって感じるころあつて時々。

まる ……（笑顔で聞いているが、その顔はなんだ？という笑み）

川島 いつどうなるかわからない（恐怖だ）から、（まるをみる）腰、気をつけなきゃと思つてます……。 （まるではない、別の思考へ向かう）

まる （カーツとなり）全然なんもちつとも知らなかったっ。ダッセー。あたしダッセー。ダッセーと思つているじぶんもダッセー。だれより腰みてるくせにヘルニア察しないのダッセーッ、耳見逃してなおダッセーッ、ダサくてダサすぎてダサすぎて、ダサイダサイ意地汚く罵つてもつと罵つて、ダサイダサイ罵りまくつて一周二周十周したら、なにがダサイのかもわからなくなつてスツキリしていた。（あたしはでも最後の方に言われた言葉を覚えている）

川島 え。ぜんぜんそんなつもりなかった。

まる （あれ以来）いつもにも増して下を向くようになった気がする。あとひとつといえたら、勇気を持てたら、「誤解を招くようなこととしてすみません」くらい引っ張り出せたのに、こわかった。そのあとひとつは、あたしの殻を内側から破ることになるのでこわかった。

間。

まる いつかの頃がダブる。下校の時間からウンとあと（の時間）。廊下にだれの足音もなく、校舎になにも響かない、空っぽのガランドウの不気味な静けさのなか、あかりの消えた廊下で待っていた。時間の感覚が永遠に伸びてゆきそうなほど、時の長さを感じた。床の一点をみつめていると、やがて朝が来て、やがて春が来て、夏が来て、秋が来て、また冬になって、幾星霜もの朝と夜を迎えたり見送ったりして、あたしが物体として暗い廊下のすみの床にこびりついてしまいうだった——はじめて文字ことばでキモチを書いて渡した、返事のもらえなかつた記憶。マルモリ、名字のせいで教室でマルマルいじられるので、コンパスを使わないでマルをキレイに描けるようになってみたら、みんなが目を丸くしたけど、目の色を変えることはなく、あとはあたしの特技が増えただけでなにも変わらなかった。変わらない日常のなかでも、キレイな丸のおかげで話しかけてもらえたダッフルコートの子。あの頃ラブレターをスラスラできて渡す勇気を持つていた女子たちは、とつくにきつと幸せに送っている（のだろう）。

パン屋には売れ残るパンがある。味もみた目も、どれもおなじに作つて、おなじ味なのに、選ばれないパンが。あたしはどっち側のパンだろうとずっとずつと思つたりする。いつそ清水寺の舞台から飛び降りる覚悟で…といつてもいくら下を向いてばかりでも飛び降りが平気ってわけじゃないので…広すぎる大海原にとりあえず綱（ツナ）を張るような思いで、ダイヤルをした。なんだかひとりであるのがどうにもイヤになったんです。好きなヒトのまえであたし、いろいろ誤解いわれても笑っていたんです。ビショールしていたんです。うす笑い浮かべて、バカみたいにならずいて、感心したような顔をして、笑っていたんですよ。笑つて。（と悲しくて泣けてくる）

まる なんだか電話してました。気がついたら。

敏行 あ、うん。

まる 風が気持ちいいです。ね。以上。

敏行 だけ？

まる 用事とくにないんで。なんか(用事)ありますか？

敏行 久しぶりで(それか)相変わらずだな。(考えて)風邪ひくよ。

まる ひきたいんで(いいんです)。

敏行 余計なこと聞くけど、彼氏できた？

まる パス。ほかありますか？

敏行 婚活してる。マッチングなんちゃらやってる。

まる 聞きたいです。

敏行 年齢、収入、初婚か再婚か、子供の有無、条件。全部自己申告。三日三晩？

まる 悩んで、あんまりウソいわないで登録。顔じゃない写真OKなところ選んで。

敏行 顔載せない？(載せなくていいの？)

敏行 雰囲気写真(つていう)。後ろ姿とか。登録者まあまあいて。顔に自信ナイのがこういうのあえて選ぶだろうけど、おれもちよっと、顔で判別されるのはちがうだろうって。そういうところあって。

まる セフレアプリ(じゃなくて)？

敏行 婚活。歳のせいで(男と女のこと)気が急いても、それには手をつけない。

まる あたりまえ。

敏行 条件に適合すると、なんかあって、なんか連絡くるのね。こっちは、会いたいといってくるヒトには、片っ端から会う気にいる。

まる 知らなかった。

敏行 (苦笑) 実は5年やってる。だれも会ってくれない。

まる ……。

敏行 こんな会えないもんなんだっておどろいた。(あっても)年に数回もない。

まる あるだけまじいい。

敏行 最近ひさしぶりだった。

まる あったんだ最近。

敏行 ホテルの喫茶店なんか選んで。待ち合わせ。

まる はじめてなのに(ホテルなんて)？

敏行 ふつうの(喫茶店)じゃ混んでたり、音楽うるさい。(もちろん)苦手だよ？

スーツ着て。エステも行って。顔だけ。フェイスエステ。(せめてすこしでも)身だしなみ(ちよっとよく見せて)。(淋しく微笑)——勝手にいろいろ思われたら、

実物が、かなうわけない。

まる うん？

敏行 一眼でわかる。

まる (なに？)

敏行 おれの相貌。みてくれにガツカリしたって。

まる ……

敏行 コツチだつてガツカリさ。

まる うん。

敏行 あとは目的のわからない時間、年に数回もないのに虚しい時間。

まる いいヒトいる。どっかに。ぜったい。

敏行 どっかじゃやでねえ……。

まる ……

敏行 もつと若かつたらちがうのか。若かつたらどうなんだ。……激しい恋愛な

つたわけじゃない。歯止めきかないような経験もある。(だけど)そういうの

まんま、断られ続けたらちよつと、たまらない。そういうヒト、きつと多く

んだろうけど、でも、たまらなくさみしいね？

まる うん……

敏行 おれ過去の糧みたいのあるから、まだマシだろうって(思う)。けど、あいつ

逃さなかつたら、おれの人生ちがつてたつて、ぜんぜんちがつてたつて……そう思

うと、口惜しいね(苦笑)。

まる あるだけマシ。贅沢いうな！

敏行 ……結婚したいとか家庭持ちたいとか、わかんない。わかつてないんだ実際。

さみしいキモチはなくはない。これを満たしてくればいいってわけでもない。

なんか、ヤイヤイいいあうとか揉めるとか、喧嘩の大袈裟じゃないようなもの

したい。

まる いい、そういうの。

敏行 このままじゃ、相手がいない同士、喫茶店で話弾めば部屋連れ込んで、好き

かどうかもわからないまま、さみしいもの同士、押し倒して、触れて、不器用に

抱き合つて。

まる 都合よくいかないよ。

敏行 相手だつてさみしい。はねつけない。押し倒されても、はね返せない。チカ

ラないんだ。むしろこみ上げるものがあつて、全部あずけてしまう(んだ)。

まる (寂しさよぎつて) そうかもね。

敏行 そんなふうには、さみしいさみしいでくつついていくほかないのかなつて、断

念みたいなの混ぜながら、身体欲しいわけじゃないけど身体求めるような、なん

か、ひとりの孤独のさみしさに突き動かされるように、結婚を引き寄せるような

やり方しか、やりようない気がしてね……なんだかね人生(苦笑)。

まる (真剣に) ねえ？ あたしのこと触れてよ。抱きしめてよ……

敏行 ……電話だからつて、よくいうわ。

まる 今夜ひとりじゃたまらない。見栄はらない。はねつけない(から)。

敏行 電話じゃなくてもなんもしないよ。

まる フフ。なんもないんじやつまんないーさみしいー。

敏行 安いスナックだよ。

まる あーさみしいよー。

敏行 さみしいね。

まる うー。

敏行とチサトが交差する。  
ふたり、すれちがってから、  
フツと感じて、相手が誰であるかを、それぞれ察する。

ふたり ——

長い迷いがあつて、やがて振り向く。

敏行 ——

視界の端で、敏行が振り向いて、見ていることがわかつて、

チサト ……

敏行 (見ていて) —— (迷つて) ——

チサト ……

敏行 (迷いながらも見ていて) ——

チサト …… (行こうとする)

敏行 待つて。

チサト ……。

敏行 待つて……。

チサト …… (向いて) —— (見て) ——

敏行 ……。

チサト ……

お互いに見つめるしかないような瞬間がある。  
音——

敏行 (かける言葉に迷つて) ——

チサト (ためらいながら、でも待つことにして) ——

時間がかかつて、やがて、

敏行 (苦笑)

チサト (間あつて、おなじく苦笑)

間。

敏行 ひさしぶり。

チサト はい。

敏行　すぐわかった。  
チサト　（わたしはぜんぜん気づかなかった、という思いで）フフ（と苦笑）。

間。

敏行　相変わらず。

チサト　相変わらずって（どういうこと）？

ちよつとの間。

敏行　キレイ。

チサト　知ってる。

敏行　（苦笑）

間。

敏行　いくつになった。

チサト　聞く（そういうこと）？

敏行　…あ、つい聞いちゃうんだ。（こう聞いてしまうのは）歳のせい。ハハ。

チサト　二十四。

敏行　ええ？

チサト　（ウソ。）二〇てまえ。

敏行　そっか。

チサト　まあそう（いうことでいい）。

敏行　うん。

チサト　おもかげ。

敏行　うん？

チサト　ぜんぜんない。

敏行　そお。

チサト　格好、顔立ち。細身だった。

敏行　いろいろ（あって）。

チサト　（いろいろで）こんな変わる？

敏行　いろいろにもいろいろあるから。いろんなことがちよつとずつ、いろんなことをいろんなふうに生んで。こんな（だ）。

チサト　…

敏行　冗談。自然の変化、年齢的な。（苦笑）いまの、これが相貌、おれの。（苦笑）

チサト　背。縮んだ？

敏行　まさか。

チサト　（見ている）

敏行　え、まさか。（でも変わっていないと思）いやいや。

チサト　フフ。元気だった？

敏行　（本当のところはわからない調子で）まあ元気げんき。（苦笑）

街の喧騒が通り抜けてゆく。沈黙。

チサト どうして呼び止めたの。(呼び止めちゃったの、と責めたい思い)。  
敏行 うん……。

間。

チサト どうして？

敏行 ずっと考えていた。

チサト ……

敏行 ずっと一生、死ぬまで一生、もうチャンスないのかなって。

チサト チャンス？

敏行 チャンスっていうのは、つまり、ストレッチがうとか、そういう。

チサト ……

敏行 「ヒトとヒトの縁、エニシつてのは、いったん繋がってしまえば、簡単に切れるものじゃない」。いまでも(そう)思っている。

チサト よく云ってた。

敏行 うん。ヒトの考えはそうコロコロしない。変わりにくいんだ。

チサト だから、断ち切って、貫いてる。

敏行 2度と連絡しないと最後に云った。

チサト そう。

敏行 あの顔、覚えている。思い出せる。

チサト そう。

敏行 ずっとそばでみてきたから、顔でどんなことココで思っているか、伝わった。  
(だからなにをいっても) もうどうしようもないんだと強く思った。

チサト そう。

敏行 だから連絡もなにも、なにもしなかった。それつきりになった。

チサト どうも。

敏行 でも、もしストレッチがったとき、おれはどうするんだろうとずっと思っていた。

そのチャンスに遭遇したときは、よっぽどのチャンスじゃないか。そのときおれはどうするんだろうって。

チサト ただの偶然。

敏行 いろんなことばを選んでいいかわからない………なにかしゃべっても、別のしゃべり方があるかもしれない。

チサト ただの、偶然。

敏行 結局のところ……

チサト ん？

敏行 (苦笑) 勇気を持てるか。わからなかった。

チサト 話しかけた(じゃない)。

敏行 うん。そうなんだ。

チサト 呼び止めて、話してる。

敏行 うん。そうなんだけど。  
チサト 待ってといた。  
敏行 うん。咄嗟にそうこぼれて。  
チサト (間あって) 待ってる。

間――

敏行 止まってくれた。  
チサト はい。  
敏行 まだ他人じゃなかった。  
チサト ……

敏行 なあ。ずっと答えが出せなかったんだ。(感動のなかについて、涙溢れそう)

間――

チサト どうしようかな、どう話そうかな。思いながら尾行しちやいそうなのに。  
敏行 そう。  
チサト 勇気。  
敏行 (苦笑) 意気地ずっとないんじゃ、口惜しいから。  
チサト なにそれ。  
敏行 (苦笑) 追いかけたって、一度も振り返らない。  
チサト 声かけたり、目あたりじゃないと。うん、気づかない。  
敏行 うん。きつと。

間――

敏行 でも、こうしてる。(間あって) めいわくだったらゴメン。  
チサト ……うん。  
敏行 時間を許さないでいい。  
チサト ……  
敏行 いたくないことまでいってしまいそうでこわい。ココ(胸)はしゃぐのも、こわい。  
チサト はい。  
敏行 (苦笑) 元気だ。うん。ちゃんと暮らせてる。うん。ヒトは変わるね。うん。あの頃さんざん、ヒトは変わりやすい人生は変化だ相変わるのが人間だ、だから「な心変わりそ」とかいつて、不変でありたいって、不変の確かさばかり拘ってたくせに。……だけど。うん。かわらないのもわるくない。いま、そう思ってる。  
チサト うん。  
敏行 いままで。ずっといままで。ありがとう。感謝。感謝だ。  
チサト なにもしてないけど。はい。

間――

チサト 声。かけてくれて。ありがとう。  
敏行 うん。  
チサト 元気で。(去る)

間――

敏行 (なるべくでたらめにうたう)

♪ フフしくて フフフしたー

日々などもう haha フフフ (忘れたの)

今更は 戻れない

沈黙。

いなくなつた方角を見遣る――

敏行 フシギと……寂しくなかった。彼女の、過去の姿をもとに、心にずっとこびりついてズツと断ち切れなかったマボロシ(幻影)……元気で。

耳を抑える。

敏行 パリン。…割れたような音だった。それから(今度は)…時計の針がコクコクと動く…オトのような音が(耳に)響いた。

音楽――

413

川島 うめよ。

なつ なにに命令。どうか。うむのはこっちだ。

川島 そうだ。

なつ そうじゃない。

川島 そうだ。

なつ は。

川島 (視線を逸らし、真顔でいう)へこたれてる。

なつ いっだつてへタレじゃない。

川島 (かまわず)身を起こつてること、したことに、じぶんが追いつけてない。

人生、急に迫られる。…でもじぶん(というもの)からは抜け出せない。いけなくてもわるくても。

なつ なに。なににおうっての。  
川島 辛抱しろといわないといった。けど、妻一筋、女房一筋、こいつ一筋。そんなふうには相手替えないのは、辛抱してるってことだと思ってる。  
なつ (わかったという調子で) あー、クズのいいぶん(聞かされてる)?  
川島 だけど辛抱一筋っていいよ。育てる。うんでよ。

間。

なつ ホロっとできない。過ぎた時間すくないし(関係深く築けてないし)  
川島 急に思い立ってウワツ(といたん)じゃない。コッチもいろいろ迷って、決めようって、決めたんだ。  
なつ ……  
川島 喜べよ。  
なつ どこを喜べっていうの。

間。

川島 ちがうことをいってる。いわなきや、いつまでも変わってかない。このままそのまままだ生活。(でも)かわるならそれもわるくない。いまだと思った。  
なつ 無理いってるわけでしょ。  
川島 そうだよ?  
なつ ほら。  
川島 ムリでいい。ムリしてるから。でも無理は覚悟と似たり寄ったりでしょ。結婚したいとか家庭持ちたいとか一緒にいたいとか、わかんない。背負わないで済むならと思ってた。けど、ムリを覚悟してみたんだ。したんだ。だから、だまっ  
てハイって。いってよ。

なつ ……

川島 いえよ。

なつ なんなん? は、なんなん?

川島 なによ。

なつ アテにできない。じぶんひとりだと思っててる。育てるの、ひとりだって。結局そうなるんだって。

川島 さみしいこという。

なつ いわせてるんだ(アンタが)。

川島 ……

なつ |

間。

なつ ぜんぶぜんぶウソです。ウソでした。  
川島 ?  
なつ ハイ。いませんココ。

川島 え？  
なつ えってなに？ よかったでしょ？ 望みでしょ？

川島 ……

なつ おめでとう。おめでとうございます。

川島 ……

なつ あたしにもいってよ。おめでとう。

川島 ……

なつ アハハ。

川島 …… 試したの？

なつ 試すって。ヒドイいかたー。

川島 …… 試してるの？ なんでそんなウソつくの。

なつ ウソって…。

川島 おろしたの？

なつ ……

川島 おろしたのか？

なつ ……

川島 なんだよ…

なつ ……

川島 なんだよ…

なつ ……

川島 どっちだよ？

間。

なつ どっちだと思う？

間。

川島 十二週こえたら、(中絶は) やめたほうがいいって (書いてあった)。

なつ …… まだこえてません。

川島 ……

なつ |

川島 どっち？

なつ どっちだったらいい？

川島 ……

なつ ねえ、どっちだったらいい？

間。

なつ フ。いろいろ考えた。ひとり考えた。選んだ。これはアンタのせいだけどア  
ンタのせいじゃない。

川島 ……

なつ ひとりで産むのヤだ。ひとりで育ててくのヤだ。

川島 ……

なつ 耐えていける自信…なかった。…ずっと相談もできないで、これだけでもう充分シンドイ苦しい、これからもっとさらにこんな…頼れないでシンドイの…耐えられなかった…逃げた…。(あたしは)ほしかった…ほしかったよ…でも…腰決めてくれない…ほしくなかったでしょ。

川島 ……

なつ —

川島 (間あって) 勝手いうようだけど。ずっと一緒に居させて。

なつ おそいよ。

4-4 ひとり

チサト 眠れないまま、ぼんやり時間を送った。まんじりともせずこのまま、夜をあかしそう。妙な再会あったけど、恋とか愛とか懐かしいとか後悔とか、実感なくて、ただ、ときの流れ、人生の時間について思い巡らせて、太刀打ちできないユーダイで果てしないものと向き合ってしまったので、どうしようもない不安に襲われた。ひとりの孤独に押しつぶされそうになって、あの子と繋がりたいと願っても、叶わなかった。だれかと話して気を紛らせたとしても、スマホは怖くていままも開けない。夫から連絡やメッセージが溜まったまま放置してある。無言の沈黙でやり過ごせるわけナイのわかっているけど、何回ものコールに恐怖を感じるようになってしまったし、かけることばがわからない。時間に任せる以外、当面の手立てが見当たらない。

(じぶんでじぶんを確認するように点検する。) 人生はじぶんの手で掴みとるもの。云われるけど、掴みとっていくしかないものだと思っっている。臆病さと消極性は、結局のところ、他人任せの不安定な人生を送ることになる。後悔はしてないけど、迷惑はかけたとは思っている。「ヒトとヒトとの縁は簡単に断ち切れない」。そう思う。簡単に切ったようにみえたとしても、すっごく苦しくて悩んで、選んで勇氣を持って断ち切らないといけない(ものだった)。いつもの日常にちがう朝を迎えたい、決心固めて、帰らない、生活ガラリ変えたくて出て行って、けど、名残惜しさを覚えないあたしもいて驚いたりもする。薄情なのかもしれない。でも時とともに、なにもかもすべて、虚(うつろ)なものになって、かつて切実だったなにもかも、どうということのない日が来るのは人生から学んでもいて、だからというわけじゃないけど、あたしの心は、知らず知らず、未来をみているんだと思う。先々に希望をつないで生きるほかないのが、もしかしたら人生(なの)かもしれない。でも心がどこに向かって、なにを求めているかわからなくても、心はあたし自身へと向かっている気がしているのは確かだった。これはとりもなおさず、あたし自身をあたしが歩もうとしていることにほかならない、ちがいない。気持ちに従わない要求に身体は反抗するのだから、じぶんの正直に従ってゆきたい。なにを望んで、なにを求めているか。納得いくまであたしを追求してみたい。

人生からできるだけ多くを絞りとって暮らしたい。

じぶんのうちなる声が、雑音に打ち消されないように、ヒトの人生のためにじぶんの時間を費やされないように、あたしはじぶんの心の音(ね)に素直に、従って、勇気を持って行動しなきゃ、とか思ったあたりでたぶん、眠気に襲われていた。日曜日をダラリしたまま過ごしたり、腕まくって意気込んでも腰を折るような睡眠に負けたり(して)、じぶんでじぶんを嫌いになって、どうしようもなく嫌いになってしまいそう。なににすがっていいかわからないから、だからだれかに「いまは休息の時間だよ」優しくいってもらえたら、すこしラクになれるのかもしれない。

415 デパート

敏行 (会いたくて) 来て…:しまいました。

間。

ひとみ え。だれでしたっけ。

敏行 こまるなあ。

ひとみ どちらさま。

敏行 ホンキ？

ひとみ フフ。

敏行 よかった。

ひとみ なに。会いたくてきたの？

敏行 え？

ひとみ わたしに会いたくてきたの？

敏行 え？

ひとみ 会いたくてきたの？

敏行 え？

ひとみ 聞こえてるくせに。

敏行 (苦笑)

間。

敏行 知らないふり。会わないって決めて、なんどももう会わないって。思ってた。

ひとみ はい。

敏行 どうして連絡(くれたの)？

ひとみ わけ必要？

敏行 まあ。

ひとみ じゃあ聞くけど。なんで来たの？

敏行 まあ。  
ひとみ モー。ゴリアテ、ラピユタ、パズー。

間。

敏行 こんなんでいいのかな。こんなんで続くのかな。  
ひとみ ひとり長いから、続くんじゃない、案外？

敏行 だいたい。

ひとみ 人生はたのしむためにある。

敏行 うん。

ひとみ うん。

敏行 これからどうする？ 映画でも観る？

ひとみ 映画なんか観ない。仕事中。

敏行 あ。(苦笑) そっか。

ひとみ ここデパート。ジロジロされてます。

敏行 あごめん。周り(の目)ぜんぜんだった。浴衣さんしかみえてなくて。

ひとみ ……(ことばに打たれている)

敏行 ……どうかした？

ひとみ いい。わたしだって、みせつけてやりたいって(思ってるんで)、はい。

敏行 そっか。うん。

ひとみ あとちよつとだし、そんなかんないから、待ってて。待っててください。

敏行 うん。

ひとみ フフ。そしたら、歩こう？

敏行 歩く？

ひとみ 街、さんざん歩く。腕組んで。

敏行 腕？ だれにみられるかわかんないの？

ひとみ ウム。でも組む。

敏行 組むかよ。

ひとみ 恥ずかしいけど、組む。

敏行 組んで歩けるかよ。

ひとみ うれしいって書いてある。

敏行 どこ？

ひとみ 全身、ぜんぶ。

敏行 だって、そうよ。

ひとみ 歩いて。歩いて。みせつけよ。

敏行 おう。

ひとみ 待ってて。

敏行 待ってて。

リナの声 もしもし——

間。

チサトの声 もしもし——

間。

川島の声 もしもし——

長い間。

川島の声 もしもし——

間。

川島の声 ——

間。

川島の声 もしもし——

間。

まる 音がして、明滅する小さな光のドットが織りなす表示に「川島くん」とあつて、視界に閃光が走った。目が眩むばかりの光と鼓膜が裂けそうな音を伴ったシヨウゲキ受けながら、むね、雷鳴（らいめい）しながら、ダイヤル——

まる もしもし。

川島 もしもし。

まる ど、どしたの？

川島 こんなこと聞くのどうかなって（じぶんでも）思うんですけど、

まる ……

川島 好きって。どういう感じですか。

まる ……え、え、え————。

まる ——ぱちぱちとなにかが瞬いた。斜め四十五度の世界は暗くて、とてもキラキラした場所じゃないけれど、ぱちぱち瞬いて、あたしはマボロシの真っ只中に落ちていた。（そんな気分のあたしはいま）……見上げている。

5-2 ひとり

ひとみ 引き続きノラ・ジョーンズ、いまでも。2002年に発売されたものだった。アルバム「Come Away With Me」。一緒に遠くへ(つて意味)。このメロデーとその頃に出逢ってたら、人生ちよっとはちがってたのかわかって、思うけど、思っても時は立ち止まらないので、巻き戻しもきかないので、流されるように流れてみる。みます。

5-3 ひとり

チサト 帰りにみかける彼女は舌打ちをしなくなった。なんでだろう心境の変化かなとも思うけど、ヒトは思いがけないものを背負ってたりするから、みかけにやらないし、わからない。顔見知りになるまえに、乗る車両を変えようと思う。スレちがった相手は…パツとしないありふれた男になっていたので、時々似たヒトをみかけたような気がして、でも面影もわからなくて、ときの長さをやっぱり感じる。輝いて、はかなく消えてしまった、かつてのいつか。近景の、遠い情景ではない夫もおなじだった。

信じられたことやものたちは、ときの経過とともに、実感がアヤフヤにほどけてゆき、断片だけの記憶になる。断片はさらにちいさな断片になって、粉々の断片になってって、ありとあらゆる記憶は、まるで目のまえを流れて、流れ去っていく、この、(目のまえの)ガラス窓に流れるフウケイとおなじように、流れるだけの現象になる。移ろいゆく。(変化して)変わってゆく。時に微かに光る。忘れないうまま、ひとつどころにキを持って、持ち続けるって…カンタンじゃないのは、自然(だった)。

目を凝らして、流れる景色のなかに、とどころに散りばめられた無数の光の窓をみる。だれかとだれかの、あかりのある暮らし。夜になったら、食事をして、身体をキレイにして、眠りにつく。だれもおなじようなことをしている。喜びも悲しみもおおきいちいさいもいろいろ感じている日常を。窓に重なって映っているあたしは、ままたらないあたしは、ジレンマの途中にいる。

5-4 ひとり

リナ 鍵はドアノブをすこし持ち上げないと差し込めない。(ドアの)塗装も剥がれている。日に焼けた畳。冬用のカーテンがほしい。かわいげな下着がほしい。じぶんを甘やかすような。マニキュアも。けど、ネットもまだ契約できていない。黒い染みの浮いた壁(をみる)。気づかれなかったけどバイト先に隣のヒトがきた。遠巻きに、み続けてしまった。いつかここに、連れ込む…とか想像するとブルブルする。

音が漏れないようヘッドフォンでレンタルDVDをみる。みながらブラジャーをズラして突起をつまむ。刺激がほしいんじゃない手つきで、手を動かし続けた。廃墟の上で、人間を見守っているコート姿の背中には、大きな白い羽根があった。地上に放り出されて人間に生まれ変わったとき、触れた手にたくさんの血がついて——「これか!」、天使じゃなくなった中年がそんなこというシーンが、かわいくて印象に残った。

5-5 ひとり

川島 みるともなしに流れていく景色をみていた。

「2度と連絡しません。荷物は早めにまとめて送ります」。メールで別れを告げられた。なにかをいわなくちゃいけないような気がする。なにもいえない。即答できかないのは、いまもおなじだった。

ひとりになった。なんとはなしにあたりを眺めた、視線が……宙を彷徨う。ピントのズレたフォーカスのよう。薄い膜が張ったような、焦点合わない、視界はボンヤリ半透明だった。手で、目を、ゴシゴシ擦る。(まえを見る。合わない。焦点の遠近法が崩れている。宙を見上げることで調整しようとする)

宙を見上げていた。上をみるのはひさしぶりだった。すこしもあかるくなかった。光のみえない闇(孤独)が、鮮やかに(ここにそこに)あった。

けど、陽がさして影のできるように、光は闇にも存在している。細かいおおきさで、真つ暗闇にもみえない光で満ちている。共存している、光と影、光と闇、天と地。奇跡と日常。

背後から電車が通り過ぎる音が聞こえる。牛乳のラムスデン現象のような、この目の(網膜の上の)半透明は、銀色の羽根を、鱗のように畳んだ翼だった。命ひとつを姿カタチもみえないままマボロシにさせてしまったのだから、この先死ぬまで消え失せない翼かもしれない。怯ず怯ず(おずおず)と目をつむる。これを恐るべきものかどうか……わからない。

5-6 ひとり

なつ 続けるくらいなら、別れのつらさを選ぶ。選んだ。さようなら。さようなら。さようなら。さようなら。さようなら。さようなら。だれもが知らんぷり。無口なまま通り過ぎてゆく。

チサト 自由と孤独バンザイ、けっこう気に入ってるんだけど、ひとりには強いんだけど……たまにこみ上げるように、クチをききたくなる。(だから)気味がわるい。

リナ 教え合います？ 番号。

チサト 電話は……やめておきたい。

リナ 会ってみたっていい。会いたい。

チサト ううん。これがちょうどいい距離……感。

リナ ……。

チサト (苦笑) 声、すぐそばだから、距離もなにもないけど。でも。

リナ 会ってみたいけど。会ってみない(会わないの意)。

チサト そう。気味がわるいところに(あなたと)繋がった。

リナ 気味がなかわるかった？

チサト ホツとした。

リナ (間あって) ホツとした(あたしも)。

チサト 説明つかないけどホツとしたんだからいいだろうって、思ったの。思ったわけ。

リナ ——鳥をみて、水を飲んでいと思うのと、神様に感謝していると思うの、どっちの心が豊かだろうか、迷信を壊すと一緒に壊れる心がある。ラフカディオ・ハーン。

暗転。

チサト ……これが迷信？ (こうして)話してる。

リナ はい。話してる。

チサト うん。(間あって) 神秘のセカイに巻き込まれています。

リナ (このセカイに) 包まれています。

間。

チサト ——それから。ほとんど消えていくように、遠く離れていくように、みえない声があった。ありがとう。沈黙に溶け込んで消えた。たぶん、彼女もどこかで生きている。あたしも。——みえない姿に、つかめない手に、ありがとう。

間。

5-8 こえ

なつの声 もしもし……。声が。聞こえました。近くでも遠くでもない。(うちなるじぶんの声じゃない) ……こえ……聞こえたんです。もしもし……。

長いくらいの間があつて——

終